

「自ら学ぶ」ための授業モデルの研究

－現在の国際情勢を冷戦から推察する－

安堵町立安堵中学校 教諭 久保茂樹

Kubo Shigeki

要 旨

これからの新しい学力観は、いままでの知識偏重を改め、「自ら学ぶ力」、「自己教育力」を育てる視点に立っている。本研究は、生徒たちが自ら学ぶためには、「学び方を学ぶ学習」の充実を図ることが大切であるという前提に立って、子どもたちがこれまで学習した様々な社会認識を通して公民的資質を養うことを目的としている。「戦争」を通してというやや難解なテーマからではあるが、こうした目的が達成される授業モデルを模索してみたい。

キーワード： 自ら学ぶ、学び方を学ぶ、社会認識、公民的資質、探究・考察する学習

1 はじめに

社会科は、社会認識を通して公民的資質を育成する教科である。社会認識とは、一言で言えば「自分たちが生活している社会が分かること」である。ここで言う社会認識は次の二つが表裏一体をなしたものである。一つは社会認識の内容、すなわち社会的事象に関する法則的な知識・概念である。そして、もう一つは社会認識の方法、すなわち社会的事象に関する法則的な知識・概念の探究方法・技術である。いわば「社会の分かり方」である。これには問題発見の技術といったマクロなものから、グラフの読み取り方といったミクロな技術までさまざまなものが含まれる。

こうしたことを顧みるに、従来の歴史教育では、教員が教科書に沿って法則的な知識・概念を子どもたちに一方的に与え続けることが多く、前者の意味合いに大きな重点が置かれてきたと感じる。自身、後者の「社会のわかり方」に対して、その力を十分に引き出させていないし、「学び方を学ぶ」学習のための改善工夫を怠ってきたと感じる。こうした反省をふまえ、身に付けさせるべき基礎・基本とは何かを、知識・理解と調べ方・学び方の両方から分析し、バランスのとれた学習指導となるよう、その方途について考えていきたい。

2 研究目的及び方法

日頃の知識・概念だけの学習にとどまらず、生徒たちがこれまでに培ってきた社会認識の上に立って、新たに「社会の分かり方」を身に付けていくための授業モデルを構築する。現在の国際社会の様子を「冷戦」に焦点をあて、その原因・ルーツとなる戦争について考察する。学び方を学ぶため、簡単なワークシートを用意し、対象となる戦争を班で選択し、調べ学習を行う。そして、班発表の後、質疑応答で生徒相互での学び合いを通して知識や理解を深める。

3 研究内容

(1) 中学校の現状から

教科書を予定通りに終わらせなければならないということから、時間に追われるよに一斉授業を行っている。第3学年における受験の前倒しにより、更にその意味合いは濃くなりつつある。しかし、こうした授業は現在推し進められている目標に準拠した評価を困難にしているし、何よりも生徒自身の興味や関心を引き出すことができにくい点においてマイナス面が大きい。何とか簡単な発問や小テストで知識・理解の確認はできるものの、生徒個々の資料活用や表現、単元に対しての関心、思考・判断などの力を育て、評価することは困難である。この研究では、こうしたマイナス面を克服しつつ、ワークシートなども活用して、生徒一人一人の関心・意欲を引き出していきたい。

(2) 授業の流れと評価について

ア 単元「国際化する世界と日本」

イ 単元のねらい

(ア) 米ソを中心とする冷戦の起こり、分断国家の成立について理解する。

(イ) 冷戦の進行のもとでの、わが国の立場の変化について理解する。

ウ 単元の指導計画

次 程	内 容	時間数
第一次	国際化する世界と日本（オリンピックのビデオ視聴）	1 時間
第二次	冷戦の構造を学ぶ（班の課題を選択・決定）	1 時間
第三次	インターネットや図書室を使っての調べ学習・まとめ	3 時間
第四次	班発表と生徒相互の質疑応答	2 時間

エ 使用するワークシート

戦後の国際社会について、調べてみよう。
<u>2年 組 番 名前</u>
<input type="checkbox"/> オリンピックのビデオを見て、どのようなことを感じましたか。
<input type="checkbox"/> こうした対立は、何が原因で起きていると思いますか。
<input type="checkbox"/> 思い当たる戦争（第二次世界大戦後）には、どのようなものがありますか。
<input type="checkbox"/> 朝鮮戦争・ベトナム戦争・ベルリン封鎖・キューバ危機・インドシナ戦争に共通する理由は。
<input type="checkbox"/> 米ソの対立を「冷たい戦争」と呼ぶのはなぜですか。
<input type="checkbox"/> わが国の立場は戦後と今では、どう変化していますか。
<input type="checkbox"/> わが国が現在の国際社会で果たすべき役割とは何でしょう。

オ 授業の流れ

(ア) 導入

NHKで放送された「オーリーブの歌」というアテネオリンピックの総集編から、複雑な国際事情を読み取る。平和の祭典と呼ばれるオリンピックにさえ影を落とす「米ソの対立」「分裂国家」「パレスチナ情勢」などに触れ、世界が二つに分かれて対立し合うようになった原因をワークシ

ートを利用して考える。

(イ) 展開

ワークシートを活用して、複雑な世界事情を考察する。こちらが用意した資料で「米ソの対立」を経済面・政治面・軍事面などあらゆる面から捉え事実認識を行う。その後「朝鮮戦争」、「東西ドイツ問題」、「ベトナム戦争」、「キューバ危機」と「日本の立場」の5つのテーマを提示する。各班でどのテーマについて調べるのか話し合った後、各班が重ならないよう選択し調べ学習を行う。インターネットで各班が調べ学習を行い、発表に必要な資料についてもこの時に用意する。その後、取り出した資料とともに図書室を利用してまとめ学習、発表のための準備を行う。この展開では事実認識のために1時間、調べ学習と資料の収集・発表準備のために3時間を使うこととする。

(ウ) まとめ

各班の発表を2時間にわたって行う。各班が発表した後に質疑応答を行い、生徒相互で発表内容を深め合う（即答できないものに対しては放課後を利用して調べ、次回に発表させる）。資料の活用・表現の技術などに着目し、説明不足などで補足する必要がある場合には、最後のまとめとして教員の方で行う。

カ 単元の評価規準について

社会的事象への 関心・意欲・態度	社会的な思考・判断	資料活用の技能・表現	社会的事象についての 知識・理解
冷戦による二つの世界の対立や悲劇を、自分なりの疑問・課題をもって、積極的に話し合おうとする。	朝鮮戦争・中東戦争などについて、自分なりの考えをもち、話し合うことができる。	戦後二つに分断された国家はどこか、その原因は何かを調べることができる。	冷戦の背景と対立の構図、占領下におけるわが国の立場を理解できる。

キ 「冷戦のしくみとわが国の立場」の具体的な評価基準

社会的事象への 関心・意欲・態度	社会的な思考・判断	資料活用の技能・表現	社会的事象についての 知識・理解
① 二つの世界の関係について興味・関心をもって取り組んでいる。 ② 発表に対して準備段階から意欲的に取り組んでいる。 ③ グループ内での協調に心がけている。	① 対立の原因を経済面・軍事面・政治面・宗教面から総合的に考察することができる。 ② 分断国家の形成を自分の考えをもって話し合うことができる。 ③ 他の班の発表を聞き取り、自分の意見と比較して考えることができる。	① 発表のための資料を探し、それを活用できる。 ② 自分の意見を整理し、相手に正確に伝えるための工夫ができる。 ③ インターネットを活用できる。	① 冷戦の背景を多面的に理解できる。 ② 米ソの対立の中で分断国家の形成や、わが国の立場を理解することができる。

4 研究結果と考察

(1) 調べ学習の意義

地理的分野をすでに習得し、歴史もほぼ全体の流れを把握できる時期にきていたこともあり、比較的スムーズに調べ学習に入ることができた。調べ学習は、いつものようにただ分かっても分からなくても座っていれば、黙っていればという時間ではない。このことは、生徒にとって新鮮であったように思われる。自ら課題を解決するために行動するという学びの姿勢に基づくことは、意義深いものとなったはずである。

(2) 発表の意義

自ら調べて用意した資料を使い、聞き手に伝えようとすることで、そこに創意工夫が生まれた。グループで取り組むこと、人前で発表すること、質疑応答に答えることで、「学び方」を学ぶ方法が身に付いてきたようである。まだまだ、スムーズにはいかないものの、私自身の日頃の授業を省みる良い機会を生徒たちが与えてくれたような気がする。

(3) 評価の意義

生徒たちの意欲・関心を十分に引き出せたかという点では物足りないものの、個々人の頑張りを見ることができ、絶対評価が容易な授業が構築できた。

5 今後の課題

今回の班によるグループ調べ学習では、テーマを決め考察するかたちをとり一定の成果を上げることができた。しかしながら、自ら課題を見付け、探究する授業モデルとしては、不完全であったように思う。その理由は、生徒の学ぼうとする意欲や関心を十分に引き出すための教材や工夫が準備できなかったことにある。

今後、こうした授業を構築していくためには十分な時間と準備が必要であるし、教員自身にも発想の転換が求められる。高等学校では新しい学習指導要領により特色選抜等の改革が見られるものの、基本的な知識・理解の定着は必要であることには変わりがない。こうした内容を押さえながら、今回のような「自ら学ぶ」学習を展開する工夫が必要だと思われる。教員の一方的な授業形態から脱却しながら、「社会の分かり方」を身に付けられるような学習指導を充実させるため、個人としても、組織としても研鑽を重ねていく必要があると思う。

参考・引用文献

- | | | | |
|-----|-------------------------------|--------|-------|
| (1) | NHK制作 「オリーブの歌ー平和の祭典 17日間の記録ー」 | NHK | 平16年 |
| (2) | 西沢宗治 「タブーの世界地図」 | 日本文芸社 | 平16年 |
| (3) | 藤井 昇 「国際情勢を読む50のポイント」 | PHP研究者 | 1988年 |